



Title	国境におけるジェンダー分析のフレームワーク：メコン河下流域の国境を事例として
Author(s)	日下部, 京子
Citation	境界研究, 5, 169-185
Issue Date	2015-03-04
DOI	10.14943/jbr.5.169
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/61168">http://hdl.handle.net/2115/61168</a>
Type	bulletin (article)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	07Kusakabe.pdf (本文)



[Instructions for use](#)

[ 研究ノート ]

## 国境におけるジェンダー分析のフレームワーク

——メコン河下流域の国境を事例として——

日下部 京子

はじめに

本稿はメコン河下流域国、特にタイ、ミャンマー、ラオス、カンボジアの国境について考察する。人と物の移動を大幅に自由化する2015年からのアセアン経済コミュニティー(AEC)、また急速に進む越境高速鉄道の案、そして増加する域内貿易など、メコン地域はますます越境活動が活発になり、越境することも容易くなっていくと思われる。しかし、この国境地域は1980年代までは資本主義国からは共産主義の防波堤として、社会主義国からは資本主義の防波堤として厳しく監視されていた。今でも、タイ＝カンボジア間のプリアビヒア寺院を巡る問題、タイ＝ミャンマー国境の少数民族との紛争など、緊張が続く国境地域が存在する。その一方で、AEC実現に向けて、道路や鉄道網整備などインフラ面の開発は進み、観光ビザが自由化され、また移民の医療サービスへの国境を超えたアクセスの整備に関する議論も始まっている<sup>(1)</sup>。

東南アジアの「文明」の概念はろうそくに例えられる。文明の中心がろうそくで光が届く限りであり、その先の闇は「野蛮」の支配するところである<sup>(2)</sup>。したがって、国境「線」という概念はもともとなく、植民者によって導入された<sup>(3)</sup>。大陸東南アジアの場合、支配は被侵略者を奴隷／労働者とするのであった。土地よりも労働力が貴重だったのである。従って、人を支配することが大切であり、支配者の富は労働力を支配することで築かれた。このような文明の概念及び支配体制により、国境線はあいまいな存在であった<sup>(4)</sup>。

国境地域ではさまざまな民族が国境をはさんで存在し、往来も盛んである<sup>(5)</sup>。国境線が

(1) Paritta Wangkiat, "Community Hospitals Need Upgrade to Cope with Cross-Border Patients," *Bangkok Post* (24 June, 2013).

(2) Ian Mabbett and David Chandler, *The Khmers* (Oxford: Blackwell, 1995).

(3) Thongchai Winichakul, *Siam Mapped: A History of the Geo-Body of a Nation* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1994).

(4) *Ibid.*

(5) ジェームズ・スコットが指摘しているように、東南アジア大陸部山岳地帯(現在でいうラオス、ミャンマー北部、中国雲南省、タイ北部、カンボジア北部、ベトナム北部などにまたがる地帯)の少数民族は、さまざまな時代の中で常に国家の支配を逃れて山岳地帯に入っていた人々である。その意味で、国境を通しての国家支配に相容れない人々であるといえる。James C. Scott, *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia* (London: Yale University Press, 2009).

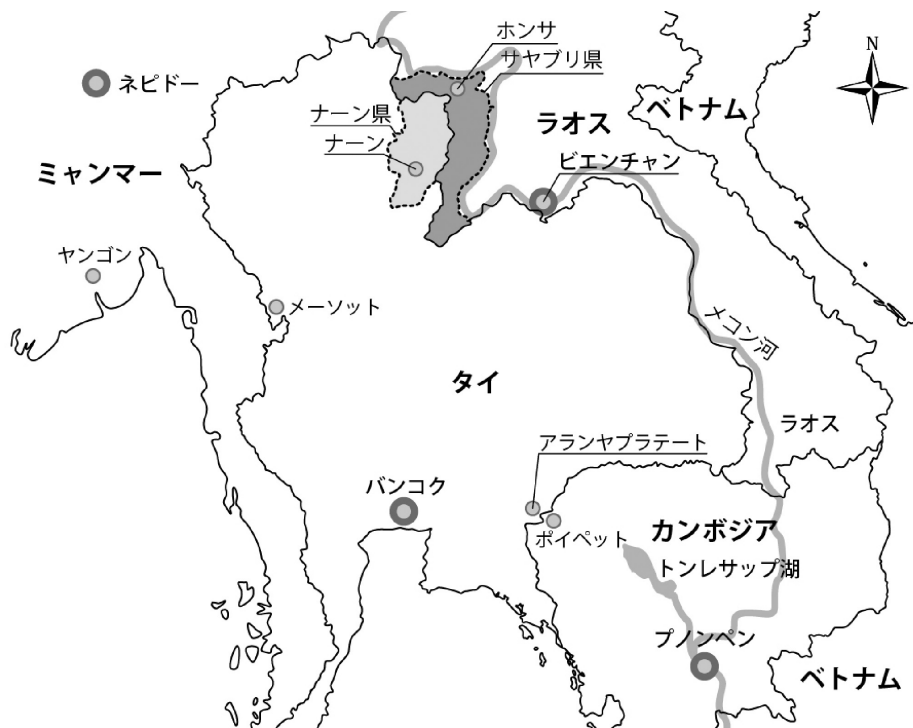


図1 メコン河下流域

出典：筆者の指示にもとづき編集部作成。

引かれても、近代化がすすみ国境地域まで国家のコントロールが及ぶまでは国境線は国境地域の住民には意識されてこなかった。

メコン河下流域<sup>(6)</sup>におけるさまざまな「特区」は国境地域に設けられることが多い。タイでは、ミャンマー、ラオス、カンボジアからの移民労働者は登録を義務づけられているが、メーソットなどの国境の町では登録なしで就労できる「特区」の指定が進んでいる。カンボジアやラオスでは国境地域にカジノを建設しているが、自国民は入ることを禁止し外国人専用の施設となっている。さらに、国境線が人為的に引かれた国境地域は多民族が混在し、往来し、またさらに内陸部に入っていくための通過地点であるという性格のために在地の社会的規範が緩まっている側面もある<sup>(7)</sup>。例えば、国境から離れた所では社会規範によって女性の行動は制限を受けることが多いが、国境の場合はそれがゆるやかだったりする。このように、行政及び社会的規範のしめつけがあいまいになっている国境地域では、人権の保護や権利の行使が難しい一方で、社会的縛り付けから離れ、ジェンダー関係の規範もあいまいになる。これは、国境の女性たちにとって、危険が高まると同時に可能

(6) 本稿で調査対象としたタイ、ミャンマー、ラオス、カンボジアはすべてメコン河下流域に位置している。よって、調査対象地域を総称する場合「メコン河下流域」と呼ぶ。本稿で対象とする地域及び登場する地名については図1に示した。

(7) *Ibid.*

性も広がることになる。ハスティング・ドナンとトーマス・ウィルソンがいうように、国境は社会的コンテクストから作られる<sup>(8)</sup>。したがって、国境に住む女性達は国境を国家が規定するものとは異なって認識し、自分たちの「国境」概念をつくる。本稿では、メコン河下流域の国境地域の村々で筆者が実施してきた事例研究から国境という特別な地域におけるジェンダー関係の変化と、そこから学べることについて考察したい。異なる国境における同時期の現象を、また同じ場における時系列的な変化をおうことで、国境がいかに社会的コンテクストにより変容していくかを考える。はじめにジェンダーと国境研究について概観し、国境地域におけるジェンダー分析のフレームワークを議論する。そのフレームワークをもとに、タイ、ラオス、カンボジア、ミャンマーの国境の事例研究を紹介する。それをふまえて、国境という場におけるジェンダー関係を分析することによって得られる洞察について議論し、ジェンダー分析全般にどのような学びがあるかを考える。

## 1. ジェンダーと国境

国境のあり方は国境地域の住民と国家との関係を規定し、そのあり方が変わることで住民と国家との関係も変化する<sup>(9)</sup>。国家はグローバリゼーションを背景として、経済の再構築をし、越境貿易も統制するわけだが<sup>(10)</sup>、それによって国境の位置づけも管理体制も変わってくる。ハスティング・ドナンとトーマス・ウィルソンは、国境地域(borderland)からの視点によって草の根の人々が国家を形成するのに果たす役割を明らかにし、国境が単に領土を区分する線としてだけではなく、いかに国家のあり方、ガバナンス体制をも規定するのかを議論した<sup>(11)</sup>。国境貿易が公認されるということは国家が介入して所得分配を左右し、国境地域での格差を生み出す<sup>(12)</sup>。ジャネット・スタージョンがメコン河下流域の国境の事例研究で指摘したように、このような国家の介入は国境地域に元々存在していた社会的・政治的・経済的な力関係と相まって、独特の国境支配体制を作り上げる<sup>(13)</sup>。

アンドリュー・ウォルカーがいうように、国境が閉鎖されていた時よりも国境貿易が公認された後の方がより規制が厳しくなることもある<sup>(14)</sup>。国境が開かれることによって、国家が国境管理に乗り出すからだ。このような国境管理にジェンダー表象は往々にして使わ

(8) Hastings Donnan and Thomas M. Wilson, *Borders: Frontiers of Identity, Nation and State* (Oxford: Berg, 1999).

(9) *Ibid.*; Grant Evans, Christopher Hutton and Kuanh Khun Eng, eds., *Where China meets Southeast Asia: Social and Cultural Change in the Border Regions* (Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 2000).

(10) Shirin M. Rai, *Gender and the Political Economy of Development* (Cambridge: Polity, 2002).

(11) Donnan and Wilson, *Borders: Frontiers of Identity, Nation and State*.

(12) Joseph E. Stiglitz and Andrew Charlton, *Fair Trade for All: How Trade Can Promote Development* (New York: Oxford University Press, 2005).

(13) Janet C. Sturgeon, "Border Practices, Boundaries, and the Control of Resource Access: A Case from China, Thailand and Burma," *Development and Change* 35, no. 3 (2004), pp. 463–484.

(14) Andrew Walker, "Regional Trade in Northwestern Laos: An Initial Assessment of the Economic Quadrangle," in Evans et al., eds., *Where China Meets Southeast Asia*, pp. 122–144.

れる。例えば、チーターの研究では、ジンバブエ国境貿易を個人ベースで独立して取り仕切っていた女性たちが「悪女」（身持ちの悪い女）として喧伝され、国家管理下の「正式な」国境貿易を確立するために利用された<sup>(15)</sup>。

国境はまた、誰の人権が尊重されるのかも規定する。キャサリーン・スタウトの米墨国境についての研究によると、国境を挟んで経済的な格差がある場合、貧しい国からの人の流出がおこるわけだが、そのことによる人権と市民権の問題は大きな課題となる<sup>(16)</sup>。誰の権利が認められて、誰が守られるかは国家によって規定される。それと同時に、スタウトがいうように、国境地域は、国家のヘゲモニーに対抗する「反ヘゲモニーの力(counter-hegemonic forces)」が発揮される可能性が高い。国境の両側の経済・政治・ガバナンス体制をうまく利用して、国の規制や管理をかわしながら、自分たちの生計をたてていく<sup>(17)</sup>。スタウト自身の研究が明らかにしたメキシコ国境における貧しい女性たちのインフォーマルな生計や住宅の確保は、このような国境という場を使って貧しい女たちが生活防衛をする例である<sup>(18)</sup>。同様の事例はタイ＝ミャンマー国境<sup>(19)</sup>、中越国境における中国人女性の国境貿易商人<sup>(20)</sup>、さらにはサンダ・タンの研究によるミャンマー＝中国国境におけるビルマ人<sup>(21)</sup>の国境貿易商人<sup>(22)</sup>にも見られる。ミッシェル・テレーズは、このような女たちの自主的かつ創造的な生活防衛の行為と、そのために毎日のように国家に対峙しなくてはいけない経験とが米墨国境における特有な女性たちの政治意識の目覚めを促したと指摘した<sup>(23)</sup>。

このような国との駆け引きが国境で可能なのは、「国は排他的な主権をその領土に確立しようとすると同時に、国境をはさんで経済的、社会的、文化的に重複したあいまいな側面も残すことに積極的に関わっている」からである<sup>(24)</sup>。国境地域が民族的に錯綜し、国境線で区切ることができないことを国は理解しながら、そこに排他的な主権を確立しようとした時、文化的、社会的、経済的に国内の他の地域とは異質な活動があったとしても、そ

(15) A. P. Cheater, "Transcending the State?: Gender and Borderline Constructions of Citizenships in Zimbabwe," in Thomas M. Wilson and Hastings Donnan, eds., *Border Identities: Nation and State at International Frontiers* (Cambridge: Cambridge University press, 1998), pp. 191–214.

(16) Kathleen Staudt, *Free Trade?: Informal Economies at the U.S.-Mexico Border* (Philadelphia: Temple University Press, 1998).

(17) *Ibid.*

(18) *Ibid.*

(19) Kyoko Kusakabe and Zin Mar Oo, "Relational Places of Burman Women Migrants in the Border Town of Tachilek," *Singapore Journal of Tropical Geography* 28 (2007), pp. 300–313.

(20) Xie Guangmao, "Women and Social Change along the Vietnam-Guangxi Border," in Evans *et. al.*, eds., *Where China Meets Southeast Asia*, pp. 312–327.

(21) 本稿では、国家の名前はミャンマー、民族についてはビルマ人と呼ぶ。

(22) Sanda Thant, *Border Trade and Identity Formation: A Case of Small-Scale Women Traders in Muse Township, Myanmar* (M. Sc. thesis, Asian Institute of Technology, 2003).

(23) Michelle Téllez, "Community of Struggle: Gender, Violence, and Resistance on the U.S./Mexico Border," *Gender and Society* 22, no. 5 (2008), pp. 545–567.

(24) Walker, "Regional Trade in Northwestern Laos" (前注14参照), p. 139.

れを容認せざるをえない。国境ではウォルカーがいうように国家のコントロールが弱くなるわけではなく、管理の形態が国の中心部と異なる<sup>(25)</sup>。アイワ・オンがいうところの「累進的主権(graded sovereignty)」である<sup>(26)</sup>。国家は恣意的に自国領土内でその支配／管理の強さを変える。そして、それは国家主権が弱くなっているからではなく、国家支配を最も有効にするために異なるガバナンスを施行しているからである。国境はこのような不分明な側面が多く容認されている場所であり、国境に生きる人々は国家との関係性を自ら操作する可能性が与えられると同時に、国家と対峙し排斥される危険性にもさらされている。

国境は文化的な多様性を内包している地域であるので、ジェンダー規範もまた多様である<sup>(27)</sup>。それは女性の行為についての許容範囲が広いとともに、弱者を守る規制も緩いわけで、暴力が横行する場でもある<sup>(28)</sup>。女性たちの人生は社会的行動規範やイデオロギー、言説により影響をうける<sup>(29)</sup>。国境研究がジェンダーの視点からみて興味深いのは、女性が「境界」をどのように超えるのか、つまり、国境を物理的に超えて新しい経済機会を捉えようとしたり、あるいは社会的な行動の縛りを超えることを模索したりする糸口となるからである<sup>(30)</sup>。社会的規範に縛り付けられた女性たちは国境という場を利用して新しい機会／可能性を獲得するが、その代償として身体的にも経済的にもより「暴力的」な環境と戦わなければならない。ケイティ・アコスタは同様な現象を国境でのレズビアンについての研究で明らかにした<sup>(31)</sup>。境界を超える、または守る／強化するということは、ジェンダー研究では往々にして形而上的に語られる。ナタリア・ディーブソーサとジェニファー・メンデスは、移民が増える中、アメリカ女性たちが移民女性の行動と移動を制限することで、自分たちの社会的規範が壊されるのを防御しようとしている事例を紹介した。移民女性たちが異なる社会的規範に従うことで、アメリカ女性たちの行動規範を規定する「境界」が壊されると危惧したからである<sup>(32)</sup>。

国境を超える女性たちを取り巻くジェンダー関係が変わることは、移民研究でも指摘さ

(25) *Ibid.*

(26) Aiwha Ong, "Graded Sovereignty in South-East Asia," *Theory, Culture and Society* 17, no. 4 (2004), pp. 55–75.

(27) Gloria Anzaldúa, *Borderlands/La Frontera: The New Mestiza* (San Francisco: Aunt Lute Books, 1987); Pablo Vila, "Gender and the Overlapping of Region, Nation, and Ethnicity on the U.S.-Mexico Border," in Pablo Vila, ed., *Ethnography at the Border* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 2003), pp. 73–104; Melissa W. Wright, *Disposable Women and Other Myths of Global Capitalism* (London: Routledge, 2006).

(28) Wright, *Disposable Women*.

(29) Debra A. Castillo and Maria Socorro Tabuenca Cordoba, *Border Women: Writing from La Frontera* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 2002).

(30) Doreen J. Mattingly and Ellen R. Hansen, eds., *Women and Change at the U.S.-Mexico Border: Mobility, Labor, and Activism* (Tucson: The University of Arizona Press, 2006).

(31) Katie L. Acosta, "Lesbians in the Borderlands: Shifting Identities and Imagined Communities," *Gender and Society* 22, no. 5 (2008), pp. 639–659.

(32) Natalia Deeb-Sossa and Jennifer Bickham Mendez, "Enforcing Borders in the Nuevo South: Gender and Migration in Williamsburg, Virginia, and the Research Triangle, North Carolina," *Gender and Society* 22, no. 5 (2008), pp. 613–638.

れている<sup>(33)</sup>。パトリシア・ペサーとサラ・マーラーは、移民のジェンダー分析をするにあたり、地理的な位置、社会的な位置、そして力関係との中で移民自身が切り開く関係性について分析する必要があると述べており<sup>(34)</sup>、これは国境研究にも十分適応される。往々にして、移民のジェンダー関係の変化は経済的な原因によるといわれている。つまり、女性が移民労働者になることで収入を得て、それによってジェンダー関係が変化するという<sup>(35)</sup>。しかし、経済的な要因のみでないことは、移民女性間でもそのジェンダー関係の変化の性質が異なることからもうかがい知れる<sup>(36)</sup>。国境を超えた移民先でのジェンダー関係の変化も、個人をとりまくコンテキストによって異なる訳である。このように、移民研究でも国境を超えることによる関係性の変化を論じているが、国境地域は、国家による介入の度合いが時々で大きく変容することから、常に国家の管理下にある首都近郊よりも国家との関係性の変化をより敏感に感じ取りやすい。移民研究が、国家による支配が確立している受け入れ国内部の社会に移民たちが同化・共存・内包されることによるジェンダー関係の変化を分析する一方で、国境研究では国境地域の人々が国家と対峙する中で国家との関係性が築き直され、それがジェンダー関係に影響する過程を考察する。

本稿では、タイ＝カンボジア、タイ＝ラオス、タイ＝ミャンマー国境の事例研究をもとに、アンソニー・ギデンスによる「社会的生活がそれぞれのコンテキストにより異なり、コンテキストにより作られる (contextuality of social life)」という議論に依拠し<sup>(37)</sup>、それぞれの国境のコンテキストの下で異なるジェンダー関係の現象を分析し、そこから国境地域という特別なスペースで女たちがいかに国家と社会規範と対峙し、「境界」を超えようとしているかについて考察する。それを通して、国境研究がジェンダー研究に与え得る重要な視点について考察する。以下の事例では、女性の人生に焦点を当てている。これは、多くの場合、国境地域の女性が労働による生産活動と出産・育児・共同体維持という社会的再生産活動の双方を担うため、より包括的に国境における国・市場との対峙を鮮明にできるからである。次章では、ジェンダー分析のフレームワークについて議論し、それに基づい

(33) Eleonore Kofman, Annie Phizacklea, Parvati Raghuram, and Rosemary Sales, *Gender and International Migration in Europe* (London: Routledge, 2000); R. S. Parreñas, "Transgressing the Nation-State: The Partial Citizenship and 'Imagined (Global) Community' of Migrant Filipina Domestic Workers," *Signs* 26, no. 4 (2001), pp. 1129–1154.

(34) Patricia R. Pessar and Sarah J. Mahler, "Transnational migration: Bringing Gender In," *International Migration Review* 37, no. 3 (2003), pp. 812–846.

(35) Tanja Bastia, "Migration as Protest? Negotiating Gender, Class and Ethnicity in Urban Bolivia," *Environment and Planning A* 43 (2011), pp. 1514–1529; Petra Dannecker, "Transnational Migration and the Transformation of Gender Relations: The case of Bangladeshi Labour Migrants," *Current Sociology* 53, no. 4 (2005), pp. 655–674.

(36) Emilio A. Parrado and Chenoa A. Flippen, "Migration and Gender among Mexican Women," *American Sociological Review* 70, no. 4 (2005), pp. 606–632; Alexandra Dobrowolsky and Evangelia Tastsoglou, "Crossing Boundaries and Making Connections," in Evangelia Tastsoglou and Alexandra Dobrowolsky, eds., *Women, Migration and Citizenship: Making Local, National and Transnational Connections* (Hampshire: Ashgate, 2006), pp. 1–36.

(37) Anthony Giddens, *Constitution of Society: Outline of the Theory of Structuration* (Berkeley: University of California Press, 1984).

て後章で前述の国境地域についての事例を紹介することにする。

## 2. 国境のジェンダー分析にかかるフレームワーク

デニス・セグーラとパトリシア・ザヴェラは、国境地域(borderland)を分析するには四つの側面があると指摘した。その四つとは、「構造」、「言説」、「相互作用」と「エージェント(行為体)」の側面である<sup>(38)</sup>。「構造的側面」は、国境がグローバル経済によって形成されていく側面を分析する。また、国境が国の領土を規定する「線」として、物理的・構造的に存在することで引き起こされる影響が含まれる。「言説的側面」は、様々な行為に対する意味づけ、セクシュアリティや、主体としての個人のアイデンティティの形成についての分析となる。「相互作用」の側面は、このような構造・言説によって形成された力関係についての分析である。そして、「エージェント」の側面は、国境という場を使って自分たちの生活を防衛し、向上させ、また不平等な関係性を変えるという作業の分析になる。しかし、最初の三つの側面が国境の人々を困む環境を対象としているのとは異なり、エージェントの側面は、人々がその中でいかに生きていくかという行為に焦点をあてている。エージェントは、言説的側面としての個人のアイデンティティの表出及び、相互作用としての他のアクターとの交渉と力関係の表出として捉えられるので、本稿では、最初の三側面を国境の人々をめぐる環境として取り上げる。

この三側面があいまって国境における社会的規範とその許容度を形づくり、また経済的な機会も生み出す。例えば、国境という場において、国境貿易を含むさまざまな経済的な機会が生み出される。しかし、経済機会を誰がどのように享受できるかは社会的に期待されている性的役割分担やもっている人的・経済的・社会的な資源によって左右される。また、逆に家族や社会が経済的機会に応える形で役割分担の変更を許容した場合、それに伴って社会的規範や価値観が変わることもあり、それが国境という場における特有の言説を生み出す。このように、これら三つの側面は相互に作用しあい、国境における独特なジェンダー関係を生み出す。以下、それぞれの側面がどのように機能したか、タイ＝カンボジア国境、タイ＝ラオス国境、タイ＝ミャンマー国境の事例をもとに検証する。この三側面は相互に影響し合うので排他的ではないが、最も顕著に当該側面が影響するものを事例として取り上げる。構造的側面はタイ＝カンボジア国境とタイ＝ラオス国境を事例に、国家が国境貿易を正式に認める、つまり国境を「開く」ことが、いかに女性たちのビジネスチャンスを制限し、女性達の機会を「閉じる」ことになってしまったのかについて明らかにする。言説的側面はタイ＝カンボジア国境とタイ＝ミャンマー国境をとりあげ、国境の女性たちが自分のアイデンティティや場所を国家の定めた国境とは異なるものとして規定す

(38) Denise A. Segura and Patricia Zavella, "Introduction: Gendered Borderlands," *Gender and Society* 22, no. 5 (2008), pp. 537-544.



ることで、国境を越えた社会的・経済的支援を受けやすくし、ビジネスや育児がしやすい環境をつくるという過程を描く。相互作用／力関係の側面は、タイ＝カンボジア国境とタイ＝ラオス国境を事例として、国境がいかに「境界」をはさんでの力関係を構築し、さらに国による政策がその力関係を増幅させる働きをしているのかについて論じる。これら一連の事例の分析を通して、構造的・言説的・相互作用／力関係の側面が性的役割分担、経済機会、社会的規範によって形成されると共に、逆に三側面がこれらを規定し直すという、双方向の関係を有していることが明らかになる。

### 3. 構造的側面：タイ＝カンボジア国境とタイ＝ラオス国境の事例から

#### 3.1 タイ＝カンボジア国境<sup>(39)</sup>

1980年代、タイ＝カンボジア国境は閉鎖状態にあり、国境沿いには難民キャンプが設けられていた。1990年代に入っても、クメール・ルージュとカンボジア政府との内戦は続き、ようやく平和が訪れたのは90年代後半になってからのことだった。90年代前半、連日の爆撃の中、魚商人たちは徒歩で、または軍のトラックに便乗して、トンレサップ湖の魚をタイに輸出していた。その当時、魚は豊富にあり、タイでは高値で売れた。国境付近はまだ紛争地帯であり、男性は兵士と間違えられるので魚商人は女性の方が有利だったといわれている。カンボジア側国境の街ポイペットは、当時ほとんど人が住んでいなかったが、住んでいる人たちにとってもいつ爆弾が軒先に落ちてきてもおかしくない生活だったという。

1990年後半に入り、クメール・ルージュが投降する中で、魚輸出入の国营会社がポイペットに事務所を構えるようになり、タイに魚を売りに行く商人たちから輸出税と称する「料金」を徴収するようになった。この会社が国营会社の民営化の中で閉鎖された後も、この事務所では「料金」を徴収し続けていたが、商人たちが県政府に訴え、完全閉鎖となった。しかし、その後は水産局、税関、交通警察、経済警察、県警察など、さまざまな政府部局がそれぞれ料金を徴収するようになった。1990年代後半から2000年代前半にかけて、このような料金徴収所は25カ所を超えていたと言われている<sup>(40)</sup>。国境の出入国管理、税関はさらに整備され、それとともに、それまで免除されていたタイ側での関税がかけられ

(39) この章は、2003年9月から2004年12月にかけてポイペット及びアランヤプラテートで49人の魚業者を対象に行った面接調査、2012年8月から2013年5月にそのフォローアップとして行った46人の魚業者の面接調査の結果に基づいている。それぞれの調査結果については以下を参照のこと。Kyoko Kusakabe, Prak Sereyvath, Ubolratana Suntornratana, and Napaporn Sriputinibondh, "Gendering Border Spaces: Impact of Open Border Policy between Cambodia-Thailand on Small-Scale Women Fish Traders," *African and Asian Studies* 7 (2008), pp. 1-17; Kyoko Kusakabe and Prak Sereyvath, "Women Fish Border Traders in Cambodia: Life Course Analysis under Changing Access to Resources and Economic Opportunities" (paper presented at Gender and Fisheries Symposium, Asian Fisheries Forum, Yeosu, Korea, 1-2 May 2013).

(40) Chea Yim and Bruce McKenney, *Fish Exports from the Great Lake to Thailand* (Phnom Penh: Cambodia Development Resource Institute, Working Paper 27, 2003).

るようになった。

1997年から2000年にかけて、国境での税関や入管などさまざまな法的手続きが整備されることにより、今までは自由に商売をしていた小規模魚商人たちは苦しい立場に立たされる。一括で政府関係機関へ関税、事業税その他の支払いをする交渉力のある大業者とは異なり、小規模商人は国境までの道中、正規／非正規の料金所で県の水産局や警察など数カ所でその都度支払いをしないといけない。また、ポイペット(カンボジア)＝アランヤプラテート(タイ)国境では、自動車での横断が禁止されており、魚は荷押し車に積み替えなくてはならないことになっている。大規模業者だと、まとめて値段交渉したり、自分の荷押し車と労働者を持っていたりするので単価が安くなるが、小さな業者には逆に不利になる。

小規模商人が不利になるのは、魚の輸出の時のみではない。内戦が収束し、道路が整備されるとともに、より多くの業者が魚の輸出に参入するようになった。そのために輸出入の魚の確保をめぐる競争は激化した。貧困にあえぐ多くの漁民は、商人からの先払いが必要であり、そのような融資ができない小規模商人は大きな仲買業者から魚を買うしかなく、仕入れ原価が高くなるため、不利になる。つまり、タイ＝カンボジアの国境が公式に開き、国境貿易の手続きが整備されることで、小規模魚商人にとっては、商機が閉じられてしまうという皮肉な結果になっている。2000年代後半に入ると、今度はトンレサップ湖の魚が急減する。

魚商人の多くは女性である。特に小規模商人は女性がほとんどである。魚商は零細でしかも汚い・臭いということで男性には嫌われるからである。また、魚商は生きている魚を叩き殺す事から年配の女性や妊娠中の女性から忌避される職業になっている。「魚のにおいが染み付いていて、他の人は私が近くを通ると鼻と覆うのよ」<sup>(41)</sup>とか「この職業だけだよ、お金を払ってさらに敬意も払わなくてははいけないのは」<sup>(42)</sup>。普通は、お金を払えば敬意を払ってもらえるよね<sup>(43)</sup>と魚商人は嘆く。このように社会的には一段低く見られている魚商人であるが、国境が公式には閉じていた時期には大きな利益を得ていた。しかし、国境貿易が正式に認可されると、利益が少なくなると同時に社会的な地位の低さは改善され

(41) バンティエンミエンチェイ県モンコルボレイ郡バンティエイニエン地区コックバラ村における聞き取りより(2013年5月29日)。

(42) このような支払いは魚業者にとってはどれが正規の関税で、どれが賄賂かは判別がつきにくい。正規にはプノンペンで輸出業者としての登録手続きをしないといけないのだが、この手続きは煩雑さからも費用の面でも小規模業者には手がでない。従って、小規模業者の輸出業は非正規なのだが、それでも、魚を県境を超えて移動させた場合の税金など、正規に規定された費用は払う。一方で、税の徴収は徹底しておらず、越県税が廃止されたあとも徴収されていたり、金額が上下したりする。また、関税に関しても、実際に魚業者が払う税金と国庫に入る金額が大幅に違うらしいということは、公然と語られている。このように実際に魚業者が支払っているもののうち、どれだけが賄賂かを魚業者自身が判別することは難しい。

(43) バンティエンミエンチェイ県モンコルボレイ郡ルセイクラオク地区ルオン村における聞き取りより(2013年8月25日)。

ず、結果として小規模魚商人は国境地域で社会的だけでなく経済的にもマージナルな存在となった。国境は、国境貿易を通して小規模魚商人にビジネスチャンスをもたらしたのだが、貿易を制度化することで彼女たちの商機を閉ざしてしまったと言える。自由貿易政策下で国境が「開かれた」というが、その実コントロールの形態が変わり、それによって国境は小規模魚商人にとっては「閉じた」という点が指摘できる。

### 3.2 タイ＝ラオス国境<sup>(44)</sup>

1980年代、タイとラオスの国境は渡れば射殺されるほどに厳しく守られた国境だった。タイのナン県とラオスのサヤブリー県は隣接しており、多くの人が国境の両側に親戚をもっていた。ル族もその一つである。彼女たちは優れた綿の織物の技術をもっており、それを交易するのに、女たちは現在の中国からタイに至る長距離の交易の旅に出た<sup>(45)</sup>。タイのナン県では、ル族の伝統的な織りのパターンが現代風にアレンジされ、1990年代にタイの王妃により表彰されるなど、注目を浴びた。そのため、この織物の需要は急激に伸び、生産が追いつかない状況であった。そこで、ナン県のル族はラオス側に住む血縁者と連絡を取り、生産を外注するようになった。一枚織ることで700～800バーツの収入になり、これは現金収入が皆無に近かったラオスのル族にとっては大金であった。この商機に多くの女性たちが手織物を始めた。その当時、ラオス国内では手織物は廃れていた。中国から安い既製服が入ってきた事で、わざわざ自宅で織る必要がなくなったからだ。それが、このタイからの需要で急速に復活した。タイで開発された新しい織柄はル族の伝統的な織物とは異なり、幅の広い織り機で織る必要があり、ラオスのル族はタイ人からそれを学び、織るようになった。これをみた他の部族の女性たちもこの恩恵にあずかろうと自分たちでも織るようになった。ル族が織り始めた頃はまだ国境が閉鎖されていたが、1990年代に入り、越境貿易が自由になった事で、ラオスの経済開発のために国境貿易を利用することが国をあげて推奨されるようになった。外部からの支援も受け、手織物が広まっていた。伝統的には織物を織っていなかった部族も国が主催する研修を受け、ル族風の織物を織るようになった。このように多くの女性たちが織るようになる事で、織物は供給過多となり、価格は暴落した。最盛期の1992年から1995年にかけての時期、800バーツで売っていた織物は、2000年には300バーツにまで価格が下落した。それでも、ラオスの家計にとっては貴重な現金収入であり、家族あげて織り手を支えた。織っている女性たちはきつい畑仕事が免除された。家族によっては、暗くなっても女たちが織れるように中国製の小

(44) この章の詳細は、Kyoko Kusakabe, "Women's work and market hierarchies along the border of Lao PDR," *Gender, Place and Culture* 11, no. 4 (2004), pp. 581–594を参照。面接調査は、2000年2月、3月、12月に実施し、35人から回答を得た。

(45) Andrew Walker, *The Legend of the Golden Boat: Regulation, Trade and Traders in the Borderlands of Laos, Thailand, China and Burma* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1999).

型水力発電機を買い求めた。織り手の女性たちの多くは現金を稼ぐ事で家族内での自分たちの地位が高まったと感じた。ところが、供給が増え続けることでさらに価格は下がっていった。糸などを自前で購入する資金のない女性たちは、下請け仕事を一枚50バーツで請け負った。このような値段で織るには、かなり手を抜かざるを得ない。価格が下がるとともに、ラオスで織られる織物の質も下がっていった。

同時に、手織物業がよくなると地方政府は2000年に織物輸出税を徴収するようになった<sup>(46)</sup>。織物輸出税は一ヶ月分一括払いが安くなる。従って、まとめて払うだけの財力のある女性が他の貧しい女性の織物を買って、まとめて出荷するようになった。交通費の高騰とあいまって、貧しく生産力の低い女性が自分で国境市場まで行って売る事は採算に合わなくなってしまった。こうして、貧しい女性たちは収入が減った上、市場に行くという移動の機会も制限され、自分たちで市場の動向を見たり、新しいデザインを習ったりする機会がなくなってしまった。このような傾向は織物の質をさらに落とす結果となった。2000年代には、サヤブリ県における手織物業は著しく衰退した。

ラオスの場合もカンボジアと同様、国境貿易がまだ国に認められないほどに小規模だった頃には女性織り手たちは高い収入を得ていたが、さらに多くの女性が参入し、規模的にも大きくなると国がそれを「制度化」する。つまり、国家が許認可制度や税制を導入する。それは国からすれば国境貿易を正式に認め、そこに秩序をもたらしたことになるが、国境地域の女性たちからすると収入の機会を閉じられたことになる。

#### 4. 言説的側面：タイ＝カンボジア国境とタイ＝ミャンマー国境の事例から

##### 4.1 タイ＝カンボジア国境

先のカンボジア国境地域の魚商人の事例では、国境貿易が整備されていく中でカンボジアの女性魚商人が排除されていく過程について論じたが、その中で生き残るために、彼女たちはタイの顧客たちとの関係を大切にする。タイ人の顧客はほとんどが女性であり、多くが1990年代から商売をしている。彼女たちは、タイ国内に広いネットワークをもっており、毎日何トンもの魚を売りさばっている。タイ＝カンボジア国境は両国の不安定な外交関係の上に成り立っているため、しばしば国境が閉鎖される。その際に彼女たちは、タイの顧客と電話で連絡を取り合い、閉鎖されていない他の国境地点で取引する。また、ポイペットの郡政府の男性たちが、国境市場をカンボジアに戻すべきだと主張しているが(1990年代前半はカンボジアに市場があったが、紛争で治安が悪いため、国境のタイ側に移った)、魚商人の女たちは冷やかである。彼女たちにとって市場の地理的な位置は重要ではない。彼女たちの顧客たちがいるところが国境であり、それより先にいくことが

(46) この織物輸出税はごく短い期間に一時的に導入されたもののようである。しかし、一時的に実施されたものであっても、これによって本文で述べているように織物の輸出行程は影響を受けた。

「越境」である。また、彼女たちがタイの顧客と交渉する時、「私たちは同じ国の人間なのだから」という言葉をよく使う。この際に使われる「国(*chaat*)」という言葉は、いわゆる「国家」ではなく、同じ地元、同じ人種、遠い親戚みたいなものという意味で使われている。つまり、彼女たちにとっての「国」とは、カンボジアという「国家」ではなく、このような人と人とのつながりなのである。国境で商売する女魚商人たちは、地理的な国境を越えたつながりの認識をもっている。注目すべきは、彼女たちの「国境」概念が男性の役人たちに象徴されるような国家の領土を分かつ線としての国境ではなく、人間関係で規定されていることである。彼女たちはタイの顧客たちとつながりを深めるために彼女らなりの言説を用いて、「国境」の概念を塗りかえているわけである。

#### 4.2 タイ＝ミャンマー国境<sup>(47)</sup>

タイには、公式に登録された者とそうでない者を合わせて200～300万人の移民労働者がいるといわれているが、その80%以上はビルマ人である<sup>(48)</sup>。タイ＝ミャンマー国境のタイ側の街メーソットには、ミャンマー内陸部からのアクセスがよい事に加え、1997年の経済危機以降、タイの内陸部で操業していた縫製工場が多く移転してきた。1997年にはほんの数カ所しかなかった工場がその10年後には140以上になっている。メーソットには30～40万人のビルマ人労働者がいるといわれている。工場労働者は大多数がビルマ人であり、町中もビルマ語を話す人の方が多い。

バンコクで働く移民労働者とは異なり、メーソットの移民労働者の大多数はタイ政府に移民労働者登録をしていない。2010年以前には登録者がいたが、国籍確認手続き及び暫定パスポートと就労許可の制度が施行されてからは、事務手続きの煩雑さと費用の高さのために、メーソットで働く移民労働者の大半が未登録のまま働いている。「入管が来たら、国境を渡って逃げればいい」というのが雇用主たちの主張であり、実際、メーソットの労働者は、入管の取り調べがあるという情報が入るとミャンマー側国境で待機する。メーソットの工場労働者はタイの法律で定められている最低賃金(現行一日あたり300バーツ)の半額ほどで働いていることも多い。また、休日は月に一度。超過勤務は午後8時からしか考慮されない工場もある。多くが出来高制である。賃金不払いや遅延は頻繁に起こり、NGOの支援を受けて法廷で争う事もある。しかし、抗争中は働けないので、多くの労働者は法律に訴える事をあきらめてしまう。

(47) メーソットでは2007年8月から2010年9月にかけて継続的にフィールドワークを行った。その詳細は、Ruth Pearson and Kyoko Kusakabe, *Thailand's Hidden Workforce: Burmese Migrant Women Factory Workers* (London: Zed Books, 2012) および Kyoko Kusakabe and Ruth Pearson, "Cross-Border Childcare Strategies of Burmese Migrant Workers in Thailand," *Gender, Place and Culture* 20, no. 8 (2013), pp. 960-978 を参照。

(48) Rosalia Scirotino and Sureepong Punpuing, *International Migration in Thailand* (Bangkok: International Organization for Migration, 2009).

法的・公的なサポートは存在しないが、それでもメーソットは他のタイの町と比べればビルマ人にとって住みやすい街でもある。中心部のバンコクとは異なり、ほとんど全員が移民労働者登録をしていないので、そもそも公的に登録することができない扶養家族と一緒に住むことにあまり抵抗がない。そのため、家族で住んでいる移民労働者は多い。就業形態も多様で、工場で雇用されず、自宅で請負の内職をする者、労働者相手に食事を売る者もいる。また、工場では働かずに他の労働者の子供たちの面倒を自宅で見ている人たちもいる。通常は日払いで子供を預けるが、近所同士だと金銭のやりとりがあいまいなまま、親切心から他人の子供の面倒をみてあげている場合もある。また、失業しても他の労働者と一緒に生計をともしたり、メーソットは基本的に農村地帯に位置しているので、道路脇や水路に自生している野草を食べたりして生活費を節約することも可能だ。

国境の街メーソットでは、国境から遠い首都バンコクとは異なり、ミャンマーでの生活の延長上で生活を送ることができる。バンコクで働くビルマ人はタイ人と区別がつかない格好をしているが、メーソットのビルマ人は自国の服装のまま街を闊歩しており、ビルマ料理の材料も多く売られている。バンコクにいるビルマ人労働者のための食料品の多くはメーソットで調達されている。また、メーソットの学校ではビルマ語で教育がなされている<sup>(49)</sup>。また、タイにはミャンマーよりもはるかにいい病院がある。しかも、タイの皆保険制度のおかげで、たいへん安く受診することができる<sup>(50)</sup>。メーソットのビルマ人移民たちは、国境という場を上手に利用し、ミャンマーの家族や親戚のサポートとタイ政府からのサポートとを組み合わせる事で低賃金でも生活してゆける。また、バンコクに比べ、メーソットの方が多様な子育て支援の選択肢がある。メーソットでは子供を近所の人に預けたり、ミャンマーから親戚を呼んできて子供の面倒をみてもらったりできるが、バンコクでは距離的にも経済的にも法的にも極めて難しい。これは、メーソットの方がバンコクよりも子育てがしやすいことを示している。メーソットには50を超える移民の子たちを対象とする学校が存在し、学齢期の子供たちが8,000人以上いるといわれている。

このように、メーソットの労働者は低賃金と劣悪な労働環境及び不安定な身分におびやかされながらも、国境という場を利用して、子供を産み、育て、教育し、家族と自分自身の生活と健康を支え、近所の人や他のビルマ人との助け合いを維持し、ビルマ人としての伝統を守り、そしてビルマに残してきた家族に思いを馳せ、彼らの生活を支え、つながり

(49) これらの学校はNGOにより運営されており、タイ政府からもビルマ政府からも認可されていない。多くの学校は、ビルマの学校のカリキュラムを取り入れている。

(50) 2010年以前の登録制度下では、登録した労働者は登録時に健康保険料を払うことで、皆保険制度でカバーされていた。現行の制度では、登録した移民労働者は公的な社会保障制度に加わるか、移民用の健康保険に加入するかしなくてはならない。メーソットの病院では移民の受診者数が多く、人道的な立場から、登録をしていない移民労働者も皆保険加入者と同等に扱われており、結果として病院側はかなりの赤字を出していたと言われている。また、メーソットにはタイ政府の病院の他に、メータオ・クリニックのようにNGOが運営している病院もあり、後者では無料で診療を受けることができる。

を保っている。タイで働くビルマ人は国家や市場原理との日常的な戦いにさらされているわけだが、国境の街メーソットでは同じビルマ人移民やミャンマー国内にある故郷とのつながりにより、その戦いが支えられているのだ。

しかし、その一方で、タイ中心部に働きに出た移民からはメーソットの移民は「滞留」しているとみられている。メーソットは安い賃金、劣悪な労働環境、そして華やかさのない小さな地方の町であり、バンコクに比べると収入などの面で大きく劣る。より多くの収入を求める移民労働者はバンコクを目指す。また、バンコクに行くには斡旋人<sup>(51)</sup>に高い費用を払わなくてははいけないので、バンコクに行った人はそれが払えたということである。そこで、バンコクに行くことができた労働者からすると、メーソットにいることは「滞留」と映る。ところが、メーソットに残る選択をする労働者も多い。特に女性がそうである。夫はバンコクに働きに行くが、妻子はメーソットに残って働くことを選択する例が多い。これは、バンコクに行くには多額の金銭を斡旋人に支払わなくてははいけないためもあるが、メーソットの方が子供とともに住みやすいためでもある。

同時に、若いミャンマーの女性が両親にタイに出稼ぎに行きたいといった場合、「タイに行くならメーソットまでだったらいい」と言われることも多い。メーソットは、バンコクと明確に区別されており、ミャンマーの延長線上の場所だと捉えられていることが窺える。タイでも首都バンコク周辺にビルマ人が集住する地域があるが、そこにいるビルマ人のほとんどは自身が雇用されている労働者であり、被扶養者は少ない。その一方で、メーソットでは、ビルマ人が労働者も家事労働者も年配者も子供もいるコミュニティを形成している。メーソットでは国境地域という、タイ国内にはあるがミャンマーと往来がしやすい場を利用して、ミャンマーから人を呼ぶなどの方法で子育てを乗り切っている。また、ビルマ人コミュニティを作り、自分たちの故郷を再現するような生活をすることで、ビルマ人労働者たちは自己のアイデンティティを体現させ、自分たちの生活の向上・維持に努力する。メーソットは地図上ではタイの町であるが、ビルマ人労働者は彼ら自身の行動と規範により、この「場」を自分たちの故郷の町の延長のように定義づけている。特に子育てなどを担う女性たちにとってはこのような定義づけは、ミャンマーからの人的サポートを受ける意味でも大切である。若いビルマ人女性たちにとっても、娘を手元から離すことを心配する故郷の両親を説得するためにメーソットがミャンマーの延長であるという言説は有効に働く。

---

(51) 斡旋人は、警察に捕まらないようバンコクへの移動を補助する場合と、移動だけでなくバンコクでの仕事を斡旋する場合とがある。

## 5. 相互作用／力関係的側面：タイ＝カンボジア国境とタイ＝ラオス国境の事例から

### 5.1 タイ＝カンボジア国境

前章で述べたように、タイ＝カンボジア国境における女性魚商人たちはタイの顧客との個人的なつながりが商売を続けていくための鍵だと認識している。彼女たち曰く、「タイのお得意様さえいれば、商売は続けられる」。しかし、彼女たちには顧客がタイに多数いるわけではなく、一人か二人だけである。このように商売相手が限定されてしまうのは国境市場の構造のせいでもある。タイの魚業者は1990年代から商売している人が多い。そのような業者は市場に常設の場所をもっている。新たな参入者はトラックで短時間だけやって来て魚を買い付ける。このように安定的に魚を買ってくれるタイの業者の数は少ないので、カンボジアの業者はほんの一握りのタイ業者との関係を大切にする。以前はタイの顧客を多数もっていた商人は、意図的に顧客の数を絞っていった。できるだけ多く買い手がいた方がいいのではないかという問いに対して、彼女たちは「たくさんいたら、扱いきれないでしょ」という<sup>(52)</sup>。つまり、安定した関係を築かなくてはいけないし、そのためにはタイの顧客の要求を確実に遂行しなくてはいけないので、複数いてはそれが不可能だという。しかし、タイの顧客とカンボジアの魚商人は同等な関係ではない。タイの顧客は他のカンボジア人魚商人からも買い上げており、特定のカンボジアの魚商人に頼っている訳ではない。その反面、カンボジアの魚商人は特定のタイの顧客に頼っており、この顧客からの無理な注文にも必ず応じようとする。また、タイ側には冷凍設備があり、タイの顧客はこの設備へのアクセスがある。その反面、カンボジアの魚商人にはそのアクセスがない。従って、魚の非常に激しい価格変動の波を一身に被るのはカンボジアの魚商人であり、タイの業者ではない。だからといって、カンボジア女性商人が男性商人よりも特段不利であるというのではなく、男性商人であっても同じく小さな商人であれば同様な力関係を経験する。しかし、小規模商人に女性が多いため、女性商人の方がよりこの力関係に影響される可能性が高いのだ。

### 5.2 タイ＝ラオス国境

前章でも述べたラオスの織り手たちもカンボジアの魚商人同様、国境を挟んだ力関係では弱い立場にある。ラオスの織り手たちは自国の国境の市場までしか布をもっていかない。そこでタイ人商人に売のみである。価格もタイ人が決めている。また、タイ人から注文を受ける場合も、価格はタイ側で決定する。国境の市場は小さく、また実際に織物を注文するタイ人の数は限られているので、カンボジアでの事例と同様、この国境でも買い

(52) バットンバン県エクプノム郡ブレックネレン地区ブレッククンチアン村における聞き取りより(2013年1月6日)。



手がより大きな力をもつ。しかし、夫と一緒に商売をする場合は女性の織り手たちもより広い市場にアクセスできる。例えば、ある織り手は夫が車を運転してバンコクまで一緒に行くので、バンコクに布を運んで売ることができ、価格やデザインについての情報も集めることができた。また、織物輸出税がかかるようになってからは貧しい織り手は国境の市場まで行く資金もなく、同じ村で仲買もする織り手に布を売り始めた。このような仲買人は村長の妻だったり、夫が国境の市場までの移動をサポートしたりしている場合がほとんどである。ラオスの織り手はタイの織り手とは力関係で弱い、夫など他の男の力をかりることでその力関係を乗り越えることができる。

### おわりに

本稿では、デニス・セグーラとパトリシア・ザヴィーラによる国境分析の四側面<sup>(53)</sup>（本稿ではこれを三側面として捉え直した）をもとにして、国境におけるジェンダー分析のフレームワークを構築し、それに沿ってタイ、ラオス、ミャンマー、カンボジアの国境地域における女性達の経済活動を中心に分析した。国境という場は、女性にビジネスチャンスを与えることも、逆に制限することもあり、同時に女性たちの行動について独自の社会的規範を作り出す。

構造的側面の章では、国家による国境貿易の管理がいかに女性たちのビジネスに影響を及ぼしたかを明らかにした。国境貿易で利益を得た女性商人や織り手たちだったが、国家が国境の管理を強めることにより、再び社会的な地位の低い商人に引き下げられてしまった。彼女たちの一時的な経済機会の拡張は社会的規範や性別役割分担、資源配分を変えることができなかつたと言える。さらには、ビジネス機会が閉ざされたのみでなく、ラオスの例にみられるように、新たに女性間の力関係が生まれたことがわかる。

言説的側面の章では、国境の女性達が国境での生存のために国境の境を規定し、国境地域の定義を作り上げる過程がみられた。カンボジアの魚商人が「国境」を顧客との関係を基準に規定したり、ビルマ人労働者がメーソットをミャンマー社会の延長として規定したりすることで、自分たちの生活と商売を守ろうとしていることが窺えた。経済的機会を求めてタイに来た移民労働者であるが、メーソットでも女性が子育てをすることが期待され、メーソットを故郷の延長として規定することで故郷から子育て支援を受けることができている。社会的規範や役割分担の縛りの中で、国境という「場」を利用して、女性たちは再生産活動をこなしている。

相互作用的側面の章では、国境を挟んでの従属関係について述べた。国境の女性たちは積極的に経済活動に参加し、独立した収入を得る。そのような独立した収入によって女性

(53) Segura and Zavella, "Introduction: Gendered Borderlands" (前注38参照).

は家庭内でその経済的役割を認められ、発言権が強まる傾向はある。しかし、その一方で、性的役割分担が根本的に変わることはなく、社会におけるジェンダー関係に影響があったというはっきりした証拠はみられない。また、国境を挟んでタイの商人たち(その多くが女性)とは従属的な関係しか結ぶことができない。しかし、その中で女性達はできるだけ経済的機会を拡大できるように工夫する。例えば、ラオスの織り手たちに見られるように、国境を挟んだタイ商人との力関係を覆すために、夫を巻き込み、男性の行動範囲の広さを自分たちのビジネスを広げる手法として使った。国境における力関係を性的行動規範によって覆した例であるといえる。

ドナンとウィルソンがいうように、国境は国境に住む人々と国家の関係を規定するのみではなく、ジェンダー関係や役割分担を築き、築き直す「場」であるといえる<sup>(54)</sup>。本稿では、マッティングリーとハンセンが示唆したように、国境という場を女性たちがどのように捉え、乗り越え、利用するのかを分析した<sup>(55)</sup>。女性たちは国境地域に住む事で、国家のヘゲモニーだけでなく<sup>(56)</sup>、社会規範とも対峙し、自らの生存と自由のために言説と経済力を駆使している。国境におけるジェンダー分析を行うことで、女性と男性の役割及び価値観や力関係が国家、市場、社会によって規定され、また逆に彼女たちがそれらを規定する過程を明らかにすることができる。その意味で、国境研究はジェンダーと開発研究に大きな示唆と洞察を与えていると言える。

(付記)本稿で論じたタイ＝カンボジア国境の調査はNational Centre of Competence in Research North-SouthおよびNorwegian Research Council、タイ＝ラオス国境の調査はInternational Fund for Agriculture Development、タイ＝ビルマ国境はInternational Development Research Center, Canadaの助成で実施された。また、国境研究への道を示してくださった伊藤るり氏への感謝をここに記す。

(54) Donnan and Wilson, *Borders: Frontiers of Identity, Nation and State* (前注8参照)。

(55) Mattingly and Hansen, *Women and Change at the U.S.-Mexico Border* (前注30参照)。

(56) Staudt, *Free Trade?* (前注16参照)。

